

明治二十三年一月三十一日發行

金澤醫學會雜誌

第五號

金澤醫學會



特別報告

新年ヲ祝ス

五・一

迎新年述感

吉田 早太郎

演 説

月經調査ノ報告(承前)

山 田 謙 治

莫爾比涅中毒ノ實驗

岡 田 剛 吉

座骨神經變態「アモンストラチオン」

田 中 正 鐸

石川縣下肝臟「ジストーマ」蟲病

岸 千 尋

治驗叢談

桂田富士郎寄稿

「ヒルシユベルヒ」氏眼療術(第一回)

寺西幸作寄稿

裁判醫事鑑定討議

自殺ナルヤ果テ他殺ナルヤ死亡原因ハ如何

一 項

死因ハ醫療ノ誤謬ナルヤ否(本年二月常會問題)

一 項

錄 事 數 件

附 錄

特別報告

○昨年十二月廿一日、本年一月十八日ノ前後、兩總會ヲ開キ、會員交々審議ノ上、左ノ如ク規則改正ノ件ヲ決セリ

第貳條 隔月發行ノ雜誌ヲ毎月發行トス。

第七條 入會金云々ノ條ヲ削除ス

第八條 會費半ケ年毎ニ金四拾錢ヲ金七拾錢トシ、但昔ノ醫學生ハ金貳拾錢ヲ金三拾五錢トス

第拾條 一ケ年會費ヲ納メサルモノ云々ヲ半ケ年トス

第拾貳條 役員中幹事五名ヲ三名トシ、更ニ編纂委員四名ヲ置ク

第拾三條 ノ(及ヒ)ノ二字ヲ削リ、更ニ(及ヒ)編纂委員ハノ七字ヲ加フ

第拾八條 ノ(編纂)ノ二字ヲ削ル且ツ本條ノ次ニ更ニ一條ヲ設ケ

第拾八條 編纂委員ハ本會ニ係ル雜誌ノ事務ヲ掌理ス

以上八件

○寄附金

一金壹圓也

在福井縣醫師(會員外)

高桑實君
小澤重吉君

木下勝次君

一雜誌發行每二金五拾錢宛也

會員

山田謙治君

一金貳圓也

全

岸千尋君

一金貳圓也

全

上杉寬二君

一金貳圓也

全

岡田剛吉君

一金貳圓也

全

中村順次君

一金貳圓也

全

吉田早太郎君

一金壹圓也

全

飯森益太郎君

一金壹圓也

全

竹腰慶三君

一金壹圓也

全

笹川宗治君

一金壹圓也

全

大木則雄君

一金壹圓也

全

森島重太郎君

一金壹圓也

全

竹内拙藏君

○會員醫學士山田謙次君ハ名譽會員ヲ辭シ益々挺身シテ本會ニ盡力スル旨ヲ通セラレタリ

○編者曰ク本會ハ明治廿三年ヲ迎フルト共ニ創立一週期ナルヲ記憶シ此既往一年間ノ成績ヲ省ミレハ基礎稍定マリ其進路ノ嚮導タル雜誌ヲ發刊シ演說數ハ二十九席演說者ハ十四アロセント(會員數ニ比シ患者ヲ會場ニ誘引スル)三回裁判醫事ヲ討論スルヲ六回雜誌ノ枚數貳百拾三ペーシ會員數ハ殆ント貳百名ニ垂ントシ每會出席員増加スル等其類聚結果ハ稍賞味スヘシ此賞スヘキ慣行決シテ價直ヲ減セス益々奮勵シテ其凝聚力ヲ堅固ニシ終ニ高尙ナル讚美ヲ買ヒ完全ナル佳境ニ達センヲ望ム

○金澤醫學會ハ明治廿二年ノ春ニ生レ一年ノ星霜ヲ積ミ大ニ進歩シ遂ニ隔月雜誌發行ヲ毎月發行ニ改ントスルノ議起リ反對論者アリシニ係ハラ

ス毎月發行ト確定セリ是レ實ニ本會ノ面目ノミナラス金澤醫學社會ノ面目ナリ豈ニ歡喜シテ祝セサルヲ得ンヤ然レモ反對論者ノ意中ヲ案スルニ蓋シ醫學ノ進歩ヲ企望セサルニアラス只急進ニ過クルカ爲メ或ハ退歩スルノ日アラントテ恐ルヽ下會費ノ増加ニ伴フ所ノ善長ナル雜誌ヲ出スニ能ハサルヲ怖ルヽ者ノ如シ然リト雖モ廿二年中ニ發兌シタル雜誌ヲ案スルニ其紙數ハ總計二百十三ペーシニシテ其内余ノ演說講義等五十四ペーシ餘ニ達シ全數ノ四分ノ一強ニ當レリ雜誌發刊ハ專テ編輯者ノ任ニアリト雖モ本會雜誌ノ價直ヲ減少セシメテ會員諸君ニ不滿ヲ抱カシムル至ルニ於テハ余モ亦多少其責任ヲ帶ヒサレハ自ラ安ニスル能ハス殊ニ雜誌附録ニ掲ケタル婦人病學講義ノ如キハ一般醫學ニ關ラサル者ナレハ爾來其掲載ヲ謝絶セント思ヒタレモ亦同學ノ進歩ヲ計ルニハ多少ノ裨益アラント信スルニ據リ來ル二月ヨリ些少ナカラ雜誌刊行毎ニ金五拾錢宛則チ一年六圓宛ノ寄附ヲ爲シ聊カ會費ノ欠ヲ補ント欲ス

○新年ヲ祝ス

會員ニヒ生

謹テ 天皇陛下ノ萬歲ヲ祝シ奉リ會員諸君ノ健康ヲ賀ス

嗚呼鳥兔ノ飛走スル何ソ夫レ迅速ナル哉明治己丑ノ年既ニ去リ二十三年ノ新天地ハ鷓鴣ト共ニ緒ヲ開キ瑞氣駿驟トシテ一官九省ニ起リ天宇晴霽一點ノ纖翳ヲ見ス森羅万象一トシ新ナラサルハナシ四海萬方處トシ春ナラサルハナシ旭章ノ國旗青空ニ飄リ門外ノ式松亭々トシ年ノ新ナルヲ祝ス海内靜謐黎民鼓腹ノ樂ヲ享ケ太平ノ祥靄然トシテ國ニ滿ツ夫レ此ノ如ク嘉祥重出スルノ時ニ際シ誰カ連聲萬歲ヲ唱ヘサルモノアランヤ然リト雖モ吾人ハ之レヲ賀セントスルニ先ナテ一言セサルヲ得サル者アリ何ソヤ曰ク陽氣ハ既ニ回ルト雖モ積雪猶之レチ壓シテ其力ヲ伸ス能ハサラシメ春意既ニ動クト雖モ梅花未タ綻ヒサルヲ以テ清香ノ馥郁タル克ハサルナリ看ヨ觀ヨ我金澤醫學會ハ創設ノ日尙ホ淺シト雖モ會長其人ヲ得ルト會員諸賢ノ熱心ナルトニ由リ諸事整頓着々トメ歩ヲ進メ金玉ノ論新奇ノ說續出蠅集スルヲ以テ各月發兌ノ雜誌ハ一轉シテ月刊トナレリ益々醫學

的新知識ヲ擴張シ、乃至社會ニ向テ大ニ光輝ヲ放シントスルノ好運ニ隨ヒ
 リ、豈亦一大美事ナラスヤ。然リト雖モ一歩退テ考フレハ前途尙ホ障害
 ノ横リテ存スルモノナキニ非ス、吾會ノ基礎眞ニ確實ナル乎、吾會ノ爲メ
 一身ヲ犠牲ニ供スルモノ果シ幾人カアル、吾人ハ此會ヲ以テ未ダ完全無欠
 トシ、確固不拔ナルモノト信スルヲ得ス。何トナレハ吾醫學會ハ未ダ幼稚ニ
 シ、生後漸ク一周歲ノ星霜ヲ經タルノミ、身體微弱ニシテ抵抗力ニ乏シク、精モ
 スレハ危險ナル疾患ヲ喚起スルノ傾キナシトセズ、若シ此兒ヲシテ將來ノ健
 康偉大ヲ期セント欲セハ、所親ノ非常ナル保護ト、善良ナル營養品ヲ要セサ
 ルヘカラス、果シテ然ラハ之レヲ養フ者其責ヤ重ク其任ヤ大ナリトイフヘ
 シ。勉メヨ諸君夫レ努力セヨ聊カ所感ヲ記シテ新年ノ祝詞ニ換フ焉。

○迎新年述感

金澤醫學會幹事 吉田早太郎

實ヤ光陰ハ白駒ノ隙ヲ過クルカ如ク流水去テ再ヒ歸ラス[時去時來天尙寒]
 未ダ春ナラスシテ春先ツ人心ニ到リ[悠悠迎歲萬事新]字内靜謐万戶旭旗ヲ
 翻シ忠君愛國ノ衷情ヲ彰ハシ欣々然トシテ明治二十三年ノ精鮮ニ就キ

上ハ聖壽ノ万歳ヲ祈リ下ハ庶民ノ幸福ヲ望ミ既往ヲ咎メス來者ノ善ニ遷ルヲ樂シミ敢テ一杯ノ祝酒ヲ酌ミ舊垢ヲ洗ント欲ス果シテ蟬脫シ得ルヤ否ヤ

回顧スレハ往年三月法律第十號忽焉トシテ社會ニ鐸鈴シ藥劑師ノ責任ヲ定メ藥品管理及ヒ取扱上一層ノ精嚴ヲ加ヘ本年三月ヲ以テ實施ノ期トシ後來醫藥分業ノ日アルヲ知ラシメ之カ注意ヲ喚起シ之ガ準備ヲ催促セラルヽニアラスヤ果シテ然ラハ醫藥分業ニ取テハ貴要ナル階梯タルヲ識得セカルヲ得ンヤ

夫ソ本邦百般ノ文物ハ維新ノ天地ト共ニ二千五百有余年ノ舊慣ヲ改メ赫々タル光輝ヲ増加シ彼ノ優美ナル芙蓉峰ニ映シテ泰西文物ト其品位ヲ競フハ快ハ快ナリト雖斥退イテ學理ト技術ノ内情ヲ分拆スレハ或ハ間然タルアラン乎尙ソヤ既往數十年間陸續トシテ我國ニ輸入シタル學理ハ尤モ高尚深遠ニシテ價直ヲキニアラス殆ント泰西ノ學理ト比肩スヘキノ點ニ達セシナラン乎無形ノ論理ハ猶ホ得易シ苟モ有形ノ技術ニ至リテハ需收シ難キコ字内一般ノ痛患ナラン蓋シ真正ノ開化ハ學理高尚技術精妙ニシ

テ互ヒニ權衡ヲ失セズ其蘊奧ニ達シ是ニ文明社會ノ本體ヲ顯象スルト謂
ツヘキナリ醫師ノ學術モ亦文明ノ至大ナル要素ナリ然ルニ本邦醫師學理
ノ進歩ハ衆人ノ許諾スル所ナリ勿論學理ノ進歩ト共ニ技術モ漸ク發達シ
タリト雖ヒ未タ並行力ノ同等如速ヲ以テ進行シタルトハ爲スヘカラス寧
ロ均一ナル權衡ヲ得サルト言ハン故ニ曰ク醫學ノ進歩ハ賞スヘシ醫術ノ
發達ハ全キヲ保スヘカラス矣

若シ式レ醫術ノ發達今一層ノ速力ヲ加ヘント欲セハ余ハ醫伯諸君ニ向ツ
テ單簡ナル一策ヲ獻セン醫藥分業是ナリ何ヲ以テ醫藥分業ハ醫術ノ進歩
ヲ援グルニ効力アルヤ從來及ヒ現時ノ醫師社會ヲ通覽セヨ醫師ニシテ調
劑ノ責任ヲ帶フル者三々伍々皆然リ而シテ開化ノ文物中尤モ高尚精密ナ
ル學術ヲ研究シ之ヲ實際ニ運轉スルコトスラ尙ホ困難ノ次第ナルニ況ンヤ
調藥ノ重任ヲ負擔スルカ如キハ人專ノ能クスル所ニアラス故ニ醫師ノ形
勢タル多クハ自身調藥ノ事業ヲ取扱ハスシテ藥劑師ヲ聘シ或ハ僅カニ藥
學ノ大意ヲ修得シタル者ヲ招キ甚タシキニ至リテハ三尺ノ幼童ヲ雇ヒ以
テ調藥ノ事業ニ當ラシメ兼テ醫師之ヲ督セリ蓋シ公衆ニ直接ノ利害ヲ被

及ズル調藥其業ヲシテ舊時ノ習慣ニ因循シ斯ル冷淡ナル所置ヲ爲スカ如キハ豈ニ人間ノ善美ナル行爲ト稱スルヲ得ヘキヤ今醫師ニシテ調藥ノ勞及ヒ監督ノ責ヲ擔ハサレハ幾分ノ贅務ヲ省キ專ラ其學理ト技術ヲ實際ニ練磨研究スルノ精嚴ヲ加フルヤ數理ノ必然ナル所ナラン乎之レ醫藥分業ハ醫師ヲ衝動シ其學術ヲ間接ニ進歩セシメ直接ニ社會公衆ノ幸福ヲ増加スル以所ニアラスヤ

更ニ視線ヲ轉シテ藥舖社會ノ狀況ヲ觀察セヨ彼ノ法令ノ爲ニ刺戟セテレ忽チ醫藥分業ノ熱度亢進シ日夜丹精心思ヲ焦シ肢體ヲ勞シ相會シテ其準備方畧ヲ議シ勇氣凜然肌膚ヲシテ寒カラシメ今ニモ分業ノ實施ヲ渴望スルノ傾向ナキニアラス果シテ其用意周到ナルヤ否ヤ稍々疑問ナキ能ハス然ルニ醫伯社會ニ於テハ其分業アルノ曉チ了悟シ却テ勉メス議セス頃トシテ顧ミス否其言語ニ顯ハレ其行爲ニ發表セサルチ如何セン嗚呼「醫藥分業」ノ先達ハ藥舖ノ特有ニアラス醫伯亦參豫シテ大イニ力アルナラフ尙モ醫藥トスル者ハ藥舖社會ト共ニ其方畧ヲ運ラシ將來互ニ其脩ムル所ノ學術ヲ以テ公衆ヲ救護シ師々相提携シ駁々乎トシテ佳境ニ進マレンコトハ切

望ニ堪ヘサル所ナリ

嗚呼醫伯社會ハ此一條ヲ以テ觀察スルモ其多事ナルヲチ了解シ得ヘシ今
ヤ進ンテ益々九重ノ尊嚴ヲ加ヘ威ヲ乾坤ニ耀サント欲セハ同業親シク一致
シ小異ヲ捨テ大同ニ和シ亦尤モ隣里ノ好ミアル藥舖社會ト交誼ヲ厚クシ
以テ社會ノ安寧福利ヲ致シ他日大イニ經營スル所アラシキ手東洋ノ一孤島
一陽來復シ雞鳴長ナヘニ泰平ヲ告ケ互ヒニ胸襟ヲ開キ舊ニ依テ傾ケタル
一杯ノ屠蘇酒能ク我醫伯諸君ノ生理上圓滿ナル麗顔ニ潮シタルハ恰モ好
シ未來ノ熱心ヲ表彰シ愈々學理ト技術ノ鸞翼ヲ張り堂々灼々トシテ天澤
日ノ紅ナル曉ヲ迎ヘテレシキ埃ノミ

(經過) 甚タ種々ナリ即チ急性ニ始マリ二三日後消散シ或ハ慢性ニ陥ル赤
經ヲヨリ慢性ニシテ經過在苒タル者アリ屢々同時ニ加答兒性鼻感冒ヲ發ス
ルコアリ

(未完)

裁判醫事鑑定討議

○十月常集會討議問題

自殺ナルヤ果タ他殺ナルヤ死亡原因ハ如何

獵師山野獵造ト云フ者アリ川住魚太ヲ銃殺シタリトノ嫌疑ニ依テ捕縛セ
ラレ裁判醫事上ノ問題トナリシ者ニシテ右魚太ノ死ハ自殺ナルヤ或ハ他
殺ナルヤ將々其死因ハ縊死ナルヤ銃殺ナルヤ鑑定ヲ要スル者ナリ
今其川住ノ屍体ニ就テ現場ノ模様ヲ閲檢スルニ頸部ニ一條ノ繩ヲ懸ケ籬
ノ側ニ腹部ヲ地上ニ接シ倒レ居レリ其籬ニハ結付タル繩ノ切レシ者懸垂
セリ

屍体ヲ望視スルニ齡凡ソ二十年計リ發育善良皮色蒼白ニシテ頸ニハ一條ノ索條溝ヲ存ス溝ノ周邊ハ著シク腫起シ索痕顯著ナリ且ツ喉頭ヲ通過スル部ハ其溝底「ペルガメント」狀ヲナシタレモ皮下出血ハナシ溝ノ方向ハ頸ノ右方上後方ヨリ下前方ニ走り前郊ハ喉頭ノ「アタムス」岬ノ直上ヲ通過シ後郊ハ左耳ノ後方迄上斜シ其后方ハ中項部迄繩溝ナシ換言スレハ索條溝ハ頸全圍ヲ還據セサル者ナリ

兩側ノ臀部殊ニ右側ニハ上ハ薦骨部下ハ右大腿部迄四十五箇ノ豌豆大ニシテ藍黑色ノ淺キ圓形創アリ周圍ハ血液色ヲ帶ヒ試ミニ其部ヲ切斷スレハ多量ノ皮下出血アリ圓形創交互ノ間ハ「リコエー」乃至「ツオル」ニシテ其大サハ皆同シ

死体ノ手及ヒ其他ノ部ニハ傷創ナシ

剖檢スルニ頸郊大血管及ヒ心臟左上房ニハ多量ノ流動スル血液アレモ左室ニハ其血液ナシ解剖上組織ノ變化ハ血管及ヒ心臟ニ發見セス

左肺大ニシテ灰白赤色ヲ帶ヒ上葉ノ肺細胞擴張シテ不正トナク空氣ヲ含

メ別段多量ノ血液ヲ含マス亦水腫ナシ大氣管枝ノ粘膜ハ紫赤色ヲ呈シ
血管多量ノ血液ヲ含メリ右肺ハ殆ント之ト同様ナレモ下葉ノ組織ハ稍々浸
潤シテ血管多量ノ血液ヲ含ミ氣管支ノ血管ニハ殊ニ多量ノ血液ヲ含有セ
リ
氣管ハ下方ニ至ルニ從ツテ血管中ニ血液ヲ含ムト多シト雖モ内腔ニハ異
物ナシ亦氣管取出シテ檢スルニ喉頭ノ下方脊椎前方ノ結締織間ニハ凝固
シタル血液アリ

咽頭ノ粘膜ハ赤ク腫起シ食道ハ空虚コシテ蒼白色ナリ

腹部ヲ剖檢スレハ内臟ハ稍々血液ニ富ミ骨盤部ハ一碗量ノ流動スル血液ア

リ
肝臟ハ肥大スルコトナク組織上異常及ヒ外傷ナシ然レモ稍々多量ノ血液ヲ含
メリ

胃ハ充分ニ食物ヲ含ミ組織上異常及ヒ外傷ナク膈ニ於テモ亦然リ

腎部ニ多量ノ脂肪アリテ外傷ノ跡痕ナク組織ハ暗藍赤色ヲ帶ヒ多量ノ血

液ヲ含ムノ外異狀ナシ

膀胱ニハ異常ナク尿充滿シ其右側ノ結締織間ニ多量ノ出血アリ

小骨盤ノ組織ニハ多量ノ出血アリ其中ヨリ二箇ノ霰彈ヲ發見セリ然レモ多量ノ出血ヲ來スヘキ血管ニ毀傷ナシ亦骨盤骨ニ異狀ナシ

腎部ヲ剖割スレハ外傷ニ相當スル處ニハ深部ニモ出血アリ

頭蓋腔ハ貧血ナルノミニシ異狀ナシ

以上ノ問題ニ對シ會員諸氏交々質疑ヲ起セルヲ以テ會長ハ之ニ答辨シ終ツテ討議ニ取掛ルヘキヲ告ク其概畧左ノ如シ

○第一說 自殺ニシテ死亡原因ハ縊死ナラン且ツ銃創ハ死後ニ受ケシナラン蓋シ自ラ縊死シ懸垂セル者ヲ山野某誤テ之ヲ射撃シ放銃ノ後近ク來リテ其現狀ノ意外ナルニ驚キ尙ホ活機ノ有無或ハ蘇生シ得ヘキヤ否ヲ試ミン爲ニ索條ヲ切斷セシ者ト鑑定セン今其理由ヲ説明センニ先ツ其縊死ノ狀態ヲ察スルニ通常斯ノ如キ正シキ縊死ハ他人ニ於テ作ス能ハス加之ナラス索繩ノ生時ニ施用シタルノ証ハ索痕正規ニシテ前方ヨ

リ後上方ニ斜行シ且ツ全頸圍ヲ環擁セスシテ後方ニ於テ缺損セルハ索條結節狀ヲ爲サス係蹄狀ナセシヲ了知スルニ足ル索溝ノ周圍其腫起著明ナルハ屍体ヲ絞首シ能ク得テ生スル者ニアラス索溝ノ底面ペルガメント狀ヲナスカ如キハ自他ノ區別ニ必要ナラザレモ亦縊死ノ証トナル其他索條局所ノ皮下出血ナキハ生時縊死ノ確証トシテ可ナラン乎蓋シ生時ニ縊リタル者ハ其部壓迫ニ由テ局所ニハ出血セス却テ索ノ周圍ニ出血シ加之ナラス此屍体ハ喉頭ノ後方脊椎ノ前部ニ出血セリトハ之レ喉頭ヲ壓迫セシニ基因セリ亦頭蓋腔ノ貧血ハ身体下部ニ銳創ヲ受ケ沈降性出血ノ爲上部貧血ヲ呈シ腎臟肝臟毛細氣管枝内肺組織ニ鬱血アルハ窒息死ノ確証ナラシ唯膀胱内ニ尿ノ充滿スルハ生時縊死ノ弱點ノ如クナレモ否ラス時トシテ精液尿等ヲ排泄セサルヲアレハ敢テ吝ムニ足ラス〔銃創ノ死因ニ非サルハ此死体ニ於ル銃創ハ貴重ナル器臟神經ヲ傷セス爲ニ死ヲ招クヘキ理由ヲ發見セス獨リ骨盤内ノ出血ハ銳撃ノ爲ニ組織ノ幾分ヲ潰乱シ之ヲ機會トシテ沈降性血液毛細管ヨリ流出シ亦

皮下結締織ノ脆弱ナル部ニモ同様ニ出血ヲ受創ノ周圍皮膚暗黒色ヲ呈スルハ銃創ノ爲ニ其部火傷的變化ヲ現ハセシナラン人或ハ言ハシ銃創ヲ受ケ頻死ノ際精神昏朦中ニ此状態ヲ裝置セシナラント是等ハ一人ノ決シテ能ク作爲シ得ヘキ業ニアラス加之ナラス生時ノ絞創ナレハ尙ホ一層著明ナル反應症アルヘキ道理ナラン之ニ由テ熟考スレハ銃創ハ死後ニ受ケ自ラ縊死シテ落命セル者ナラン

○第二説 他殺ニシテ死因ハ縊死ナラン如何トナレハ銃創ハ致死スヘキ重傷ニアラス故ニ銃創ノ爲昏睡ニ陥リシ者ヲ殊更ニ縊死狀ニ絞殺セシハ其籬ノ低ク索條ノ弱キニ據テ推了シ得ヘシ加之ナラス同大ノ損傷腎部ニ撒族シ固有ナル藍赤色ヲ呈シ且ツ滲血ニ其他骨盤内ニ敵彈ヲ發見シ膀胱部及ヒ創傷深部出血ノ如キハ生時ノ絞創ナル確症ニシテ縊死モ亦死後ニ行フタルニアラス故ニ受創ノ後人事不省ヲ機會トシ尙ホ血液ノ循環ノ存スル間ニ縊血ノ狀ニ懸垂セシナラン

○第三説 他殺ニシテ死因ハ銃創ノ爲ニ發シタルシヨツクナラン即チ銃

創ニ因テ致死スヘキ出血ナク心臟麻痺シテ腦貧血ヲ發シ倒レタリト雖
モ其組織未ク充分ニ生活力ヲ失ハサルモ他人ノ縊死狀ニ構造セシナラ
シ若シ第一說ノ如ク沈降性血液ナレハ下肢ニモ變色ヲ呈セサルヘカラ
ス加之ナラス自ラ縊死シタル者ナラン乎尙ホ著明ナル縊死狀態ヲ顯ハ
サン其上索繩モ佳良ナルヲ得ス爲ニ自斷セシナラン且ツ肺及ヒ咽頭ノ
變化等窒息死ニ類似スルカ如キハ生時ノ病的變化ナラン亦僅ニ散彈ノ
二個ヲ深部ニ殘留スルハ益々他殺ノ疑ヒアリ蓋シ淺部ノ彈丸ヲ除去シ深
部ハ拔除シ得サルナラン其他頸部索條痕ノ不完全ナルハ其裝飾タルヲ
察セサルヘカラス之ニ由テ觀レハ銃殺ノ後直チニ縊死ノ狀態ヲ模擬セ
シナラント鑑定ス

○第四說 自ラ縊死シタルハ第一說ニ同様ナレモ銃創ハ死後ニ受ケシ者
ニアラス蓋シ縊死ノ場所ハ高所ニアラス比較的低所ナレハ致死ニ稍々
時間ヲ費ヤセシ爲ニ索溝ハ完全ナラス然ルニ縊首スルヤ否未タ僅カニ
生活ヲ保有スル際銃丸ニ射撃セラレ索條モ斷絶シ終ニ死亡セシ者ナラ

ン因テ銃創モ未タ死後ニ射撃シタル如キ冷カナル徴候ニアラス充分ナル生時ノ銃創ナルヲ證シ得ヘキナリ故ニ自ラ縊首シタル際銃創ヲ受ケシ者ナラント斷定セン

○第五說 銃丸ニ射撃セラレ必ス落命スルヲ悟リ自ラ縊死セシナラン蓋シ總テノ死體徴候ハ之ニ由テ説明スルヲ得ヘシ

以上五個ノ說ヲ根據トシ出席會員互ニ舌戰シ會頭ハ論議殆ン盡タルヲ察シ採決セシニ孰レモ過半數ニ達セス說ノ歸スル所ヲ知ラス然レモ

第二說 銃創ノ爲メ精神昏朦中ニ絞首シ縊死狀ヲ裝ヒタル者 起立二十名

第三說 銃殺スルヤ否直チニ起立十五名
縊死狀ニ構造セシ者

ニシテ之ヲ概畧スレハ前問題ニ對シテハ他殺ノ疑團ヲ多數トセサルヲ得ス

次テ會頭ハ鑑定書ノ説明ヲナセリ

川住魚太ノ死體現狀及ヒ解剖所見ヲ以テ考フレハ其死亡原因ハ外傷亦ハ窒息ニ基ツクヲ明了ナリ然レモ此兩因ノ何レカ主要ニシテ直接死因

ヲ斷知スルヲ難シ則チ死体ノ状態ハ什麼ニモ窒息ニシテ氣管ノ壓迫ニ依ルヲ頸部ニ存在スル索痕ニテ明了ナルカ如クナレモ背部ニ存スル散彈ノ創傷モ亦死因ト見做スヲ得ヘシ其他索痕ハ絞痕或ハ扼痕コアラズシテ縊首痕ナルハ索溝ノ經過深サ等ノ状態コテ明晰ナレモ自殺ナリトノ確症ハ恰モ自殺ニ非ストノ確徵ナキト一般屍体檢査上コテ明言スルヲ能ハス唯銃傷ハ自殺ノ爲ナラサルハ斷シテ明亮ナリ

右ノ理由ヲ以テ考フレハ魚太ノ死ハ自殺ナルヤ他殺ナルヤ果タ窒息ノ爲カ外傷ノ爲カハ死体檢査上ニハ明瞭ナラスト雖モ銃傷ハ他人ノ爲ニ起リ縊首ハ自ラ企テタル者ノ如シ蓋シ大人ヲ縊ルハ甚タ至難ノ業ナレハ他ノ方法ヲ以テ殺スヲ尋常ナリトス

因テ此鑑定ノ如キハ斷言セサルハ却テ名醫ノ鑑定ト謂ツヘシ若シ妄リニ臆想ヲ爲シ鑑察ヲ下スルハ判官ノ迷ヲ招ク恐レアリ

當時ノ事情ヲ陳述シタル者ヲ見ルニ果シテ錯雜ナル事實ノ裁判ニシテ魚太ハ同類ヲ誘ヒ林盜ヲ望ンテ近傍ノ森林ニ入り山野獵造ニ銃射セラレ徒

歩シ遁ル能ハサルガ故ニ同類ノ者ハ車ヲ以テ救助セント欲シ暫時郷里ニ歸リシカ魚太ハ銃創ノ疼痛ニ忍ヒス終ニ自殺ヲ企テタル者ト視エ嘗テ魚太ノ腰間ニ狹ミタル細繩ヲ以テ縊首セシコモ發見スルニ至レリ

○明治二十三年二月常集會討議問題

死因ハ醫療ノ誤謬ナルヤ否

○三歳ノ幼兒アリ誤ツテ右膝關節部ヲ車輪ニ軌轢サレ直ニ某醫師ニ治療ヲ托シタルニ拾三日ヲ經テ死亡セリ故ニ其死亡原因ハ如何ナルヤ醫師ハ治療上ノ誤謬ナルヤ否ヤノ鑑定ヲ要スル者ナリ

依テ醫師ノ始末書ヲ驗スルニ曰ク三歳ノ小兒外傷ヲ以テ治テ乞フニ據リ之ヲ驗スルニ右膝關節部ニ六センチメートル長徑ノ創傷アリ皮膚ハ上方及ヒ下方ニ開放シ膝内側ノ皮膚ハ剝脱セリ創傷ノ深サハ詳細ニ檢セサレハ了知セスト雖ヒ關節ハ腫起スルコトナク出血ハ寡ナク骨折ハ存在セス小兒ハ強壯ニシテ營養佳良其他外傷ナク亦認ムヘキ疾病ナシ依テ先ツ石炭

酸水ヲ以テ創面ヲ洗滌シ護謨管ヲ送入シ縫合シテ「ガーゼ」ヲ掩ヒ綳帶ヲ施
コセリ時ニ二月廿七日ナリ

然ルニ二十九日ニ至リ尿暗褐黑色トナリ全身痙攣ヲ起シ体温亢進セシニ
據リ綳帶ヲ解キ檢スルニ膝内側ハ腫起シ皮膚及ヒ皮下結締織ハ少シク壞
疽狀ヲ呈ス其壞疽ノ深サハ驗定セサレヒ石炭酸中毒アリト思考シ爾後石
炭酸ヲ廢シ「ザルチール」酸水ヲ以テ之ヲ洗滌セシニ中毒症狀ハ消散スレヒ
痙攣ノ狀態ハ依然タリ

同法ヲ持續セシヨ三月二三日頃ハ創面強ク腫起シ脛骨大腿骨ノ一部ヲ露
出シ膝關節ハ外側ニ於テ凡ソ三仙迷ノ孔ヲ以テ開通シ其縁ハ灰白色ヲ呈
セリ故ニ大腿ノ切斷術ヲ施コサント思考シタレヒ軟部ノ浸潤ハ既ニ股關
節部ニ波及シタルノ景況アリ且ツ熱度甚ク高キヲ以テ同手術ヲ試ミス先
ツ壞疽ニ陷リタル部分ヲ切除シ格魯兒亞鉛液ヲ以テ該部ヲ腐蝕セリ

三月六日ニハ惡寒發熱甚クシク多量ノ膿ヲ排泄シ遂ニ同月十日ニ至リ虐
狀ニ因テ死亡セリ此時創面ヨリ出血シタレヒ多量ヲラスシテ直チニ止血
ス

コルラ

セリ云々

録事

○開會

○十一月十六日第九回常集會ヲ開キ

裁判醫學ノ必要

田中正鐸君

視力検査ニ就テ

寺西幸作君

結核性腹膜炎實驗(患者ヲ會場ニ誘致セリ)

岸千尋君

右終ルヤ裁判醫事討議問題(病死ナルヤ果タ他殺ナルヤ否)ヲ討究セリ

○十二月廿一日第拾回常集會ニ兼テ規則改正ノ件ニツキ總會ヲ開キ

隔月發行ノ雜誌ヲ毎月トシ其他一二ノ件ヲ改良セリ

○明治廿三年一月十八日第十一回常集會ヲ開キ

遺傳性肩胛關節脫臼ノ實驗

駒形重光君

腸間膜瘻ノ實驗(解剖上組織標品ヲ示サル)

岸千尋君

醫學的哲學

寺西幸作君

右終、チ會員七名ノ建議ニ由テ毎月發行ニ決セシ雜誌ヲ舊來ノ如ク維持
 センコナ請求シタルヲ以テ評議委員ノ決議ヲ經テ直チニ總會ヲ開キ點燈
 時ニ及ンテ散會セ、但シ議決ハ前十二月ノ總會ノ時ニ同シ尙ホ規則改正
 委細ハ本雜誌特別報告ヲ觀フレヨ

○寄贈書籍

京都醫學會雜誌	自二十二號 至二十四號	三冊	同	會
北越醫會々報	二十二號	一冊	同	會
裁判醫學雜誌	自十四號 至十五號	二冊	同	會
緒方醫院醫事研究會雜誌	二十一號	一冊	同	會
熊本醫學會雜誌	四十號	一冊	同	會
產科婦人科研究會雜誌	八號	一冊	同	會
輓近外科學會雜誌	拾一號	一冊	同	會
大坂興醫學會月報	拾二號	一冊	同	社

藥學月報

自五號
至六號

二冊

石川藥學會

規則摘要

- 本會ハ醫○ヲ研究シ其進歩ヲ圖ルニアリ
 - 前條ノ目的ヲ達セシカ爲メ毎月一回講談會ヲ開キ雜誌ヲ發行ス
 - 本會ヲ名テ金澤醫學會ト稱ス
 - 本會ノ會員タル者ハ石川縣ニ居住ノ者及ヒ石川縣ニ縁故アル醫學博士醫學士醫師及ヒ醫學生ニシテ第六條ノ手續ヲ以テ入會シタル者ニ限ルヘシ
 - 本會ニ裨益アリト認ムル者ハ本會ノ決議ニヨリ推撰シテ名譽會員トス
 - 入會セント欲スル者ハ姓名族籍現任所年齡ヲ記シ會員一名ノ紹介ヲ以テ本會ニ申込ミ會員ノ証ヲ受クヘシ
 - 本會々員ハ名譽會員ヲ除クノ他會費トシテ半箇年毎ニ金七拾錢ア一月七月ニ前納ヘスシ
 - 但シ學生ハ半ケ年毎ニ金三拾五錢トス
 - 退會セント欲スル者ハ會員ノ証ヲ添ヘ其旨本會ニ届出スヘシ
 - 但シ既納ノ會費及ヒ入會金ハ返附セス
 - 半ケ年以上會費ヲ納メサルモノハ退會者ト看做ス
 - 總集會ハ毎年四月開會スル者ニシテ前年度ノ諸報告ヲ爲シ役員ヲ改撰シ演說講談ヲ爲ス者トス
 - 常集會ハ第二條ノ題旨ニヨリ毎月第三土曜日午後一時ニ開會スル者ニシテ毎回凡ソ三席ノ講談若クハ演說ヲナシ終テ質談ヲ行フ
- 但シ八月ハ休會ス

會 告

總テ書狀物品等ハ石川縣金澤市下新町五十九番地本會事務
所宛ニテ御送附相成度候也

金澤醫學會事務所

會 頭 木 村 孝 藏

副會頭 山 田 謙 治

幹 事 上 杉 寬 二

同 岡 田 剛 吉

同 吉 田 早 太 郎

同 藤 本 純 吉

同 中 村 順 決

恭 賀 新 年